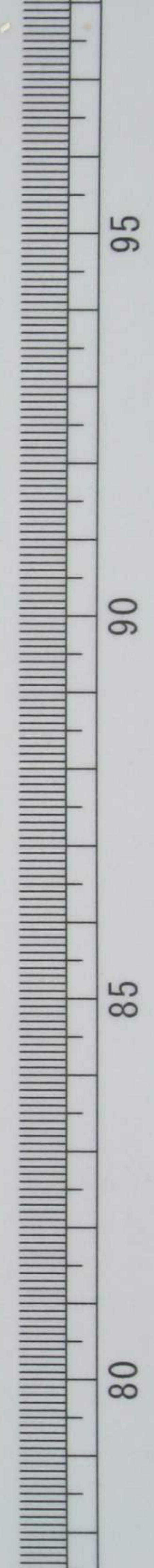


宮生哲

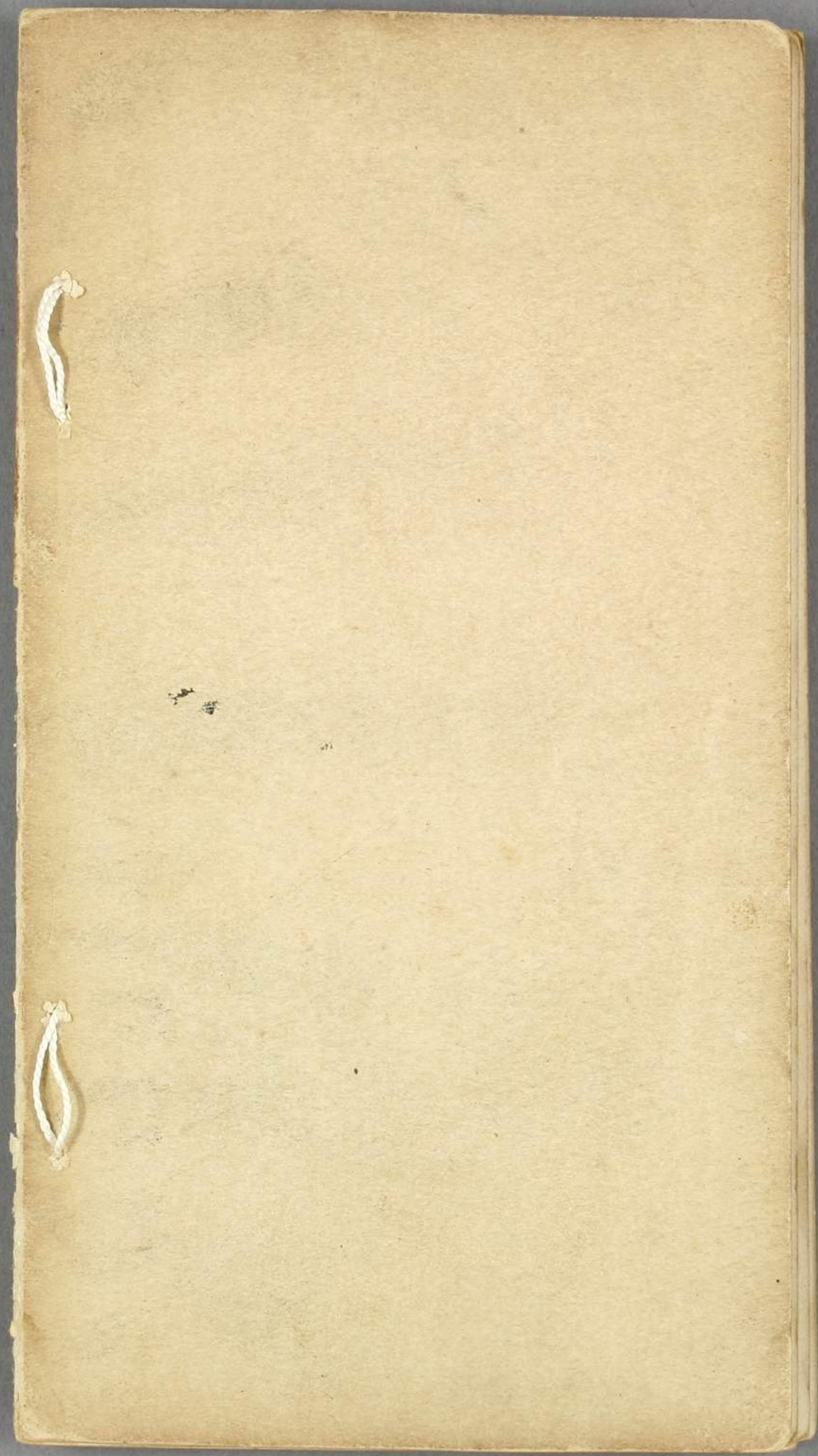
二人造



本間文庫
文庫 14
D111







文庫14

D111

14
111

緒言

1 言 緒

寫生帖とは何ぞ、曰く寫世帖なり、讀んで字の如し。
二人連とは何ぞ、曰く二人連なり、讀んで字の如し。
何の寫生ぞ、畫と文とのなり。
何處の寫生ぞ、武相のある山とある川とのなり。
二人とは誰ぞ、赤姫と予となり。赤姫は畫を以てし、予は文を以てし
たり。又いへば、畫と文との二人づれともなりなむなり。
畫巧ならず、文拙し。たゞ寫生、儻なきところ取るべきなり。
畫として取るに足らず、文として取るに足らず。たゞ人々かゝる擧

14
111



あれかしこのいざなりなり。
この擧は娛樂なり、進みては、風俗史、地理誌の資料ともなりゆべきなり。
買らむとて作りしにあらず、買はずともよきなり、同好諸兄の信に代ふるを得むが、幸の極なり。

千亦まゐるす

二人づれ

寫生帖

浅川

汽車は浅川につきぬ、十時過る頃なりき。
あたらしき停車場の前に、こも新らしき板葺の小さき柱の家二三棟、軒には千歳講真心講などいふ染手拭數多かけて、

14
111

其上にすしと書きたる旗なびけり、高尾山にものする善男
善女の憩ふ所にやあらむかし。

こゝを見て左にいづれば、一筋の道平らかに白く、藁葺の青
く苔むせる間を通れり。梭の音こゝにかしこに聞ゆ。

いさゝ川道に沿うてながれたり、冠の纓を洗ふに足る。水車
かけたり。家鴨泳げり。

村のはづれにやゝ大きな川あり、橋かけたり。橋を蔽ひて
大きな楓の樹あり、下ゆく水を酒ならぬ酔の色にそめた

り。苧田、苧残したる田、藁葺二三軒、又苧田、苧残したる田、藁葺
二三軒、後の山は押なべて紅葉せり。

○

柴山の柴あかくなりて一もとの五十尋ほこ杉い
よゝたかしも

山もとのわら屋のむねに苔むして村しづかなり
には鳥のこゑ

枯のこる桑の木みちの道ぞひの苧田に干せりこ

14
111

とくにひわら

溪川のうづまき落つる瀧つぼに鯉かものぼるや

まめかも棲む

たゝなはる丸き小山は黄になりてくれなるにな

りて冬は來鳥

氷川神社

草葺のみの浅川を過ぎて來る所、ピラミッドの半面のやう

なる芝山の朽葉したるが、煉化石疊みたるやうなる麓に、雲にそゝる杉の一村、晝のやうなり。赤き鳥居たてり。珍らしみゆかむとすれば、ゆらくと動く木の橋あり、水浅けれとさすがに清し。桑の木の枯れながら立てる畑の道一筋、こゝを通れば、かの鳥居の下にいでぬ。拜殿は塵のすみかとなれり、晝のまは此地の子どもが公園となれるなるべし。

下げたる白髪まじりの切髪は、いづこの誰がさゝげしならむ、珠数のやうにせる繭と合せたるを見れば、所謂糸屋とか

14
111

いふものにや、その子その孫の糸商いとせうにとて都に出でたるが、
幼き折よりの許嫁の妻を嫌ひて、北の里とかいふらむ所に
入ひたりて、かへり來ぬを憂ひて、かくは祈りけむ。あるはこ
の邊りの大山持が、父祖父の植ゑけむ心もしらで、いたづら
に切り盡し、酒にかふるを歎きてにかあらむ。あるは子より
もといひけむ孫の病をかなしみてにかあらむ。何にしても
一世の飾とすべき髪おろしつるは、故なくてはあらじと、あ
はれさいふ限なし。

○
峯にならぶ松と杉とを残りおきてこすゑ残らず
色に出にけり
並べ干す新藁の上にもみぢ葉のにしき吹きみだ
す山嵐のかぜ
からさをの音よりほかの音もなし山にそひたる
草ぶきのむら
鈴なりの柿の木は實はあかくなりて山また山の



あき更にけり
葉一葉のこらずなりてすいなるの柿の實紅しさ
かせたるごと

山 下

「こゝは何といふ地よまろだ」

「浅川村字山下でございます」

かく問答したるは、われと茶店の媼となり。

14
111

「ひどい處らしいが、食ふか、」

「奥へ這入るほど、ひどくなりはずまいか、」

われと赤姫と二人は、かくかたらひつゝ、あきめて入りしその茶店なり。

表の障子には、大きな文字して、萬荒物類とかきて、其まはりに紙類わらじ巻煙草と小さく書き回せり、又一枚には山吹御茶づけとして、右にはきそば、左にはうどんとかけり。さて八枚の障子八枚ともみなこの二とほりにかゝざるなし。

14
11

屋號は新玉川屋とぞ。
大きなる圍爐裏きりて、薪くべたり。かけたる茶釜はその煙にふすぶりて、眞黒になれり。梁より垂れたる鐵の自在、これのみは新らしきやうなれど、煤、糸のやうにすがりて、いさゝかも生々しくしき所なし。
四五人の子供は、母一人をめぐり圍みて、蒲團一枚の中に、巨燧のやうにむらがるなりけり。
かの黒き茶釜より、直にくみてくれたる茶、その釜にあやか

りたる色なり。
酒をといへば、すぐその茶釜に徳利入れて、あたゝむるなり。火をといへば、その爐より取りたるたき落しのへろくしたるを、土火鉢に盛りてくるゝなり。
飯を乞へば、菜は芋と豆腐もどより他國よりわたりしものにあらず、その家人の耕してつくりしそれなるへし。お給仕の女の髪のお、紛々と鼻を突くに、強ひて箸さる。
見とほしになれる裏の庭に雞あそべり。

14
11

○

みぞれかも雨かも降らむ曇り日のさむき朝をや
まみちのぼる

もみぢする山また山のやまもとに家まばらなり

茶の花のさく

名ぐわし梅の木橋のはしのうへに木をおひてゆ

く里の子二人

矯められず強ひられずして白菊も黄菊も老いぬ

草ぶきの庭に

山 中

路は行どまりになれるが如く、山また山重なれり。みな丸き
茅山にして、久方の日の光にも消えせぬ霜の如く、白き穂を
のへをめぐりて、風になびけり。麓には杉楨くらきまで茂れ
るに、いづこなるらむ、水の音たうくさきこゆ。
地の名をきかむとすれど、人なく家なし。

14
11

われ等は今日は小佛の山を越えて、與瀬の方に出でむとおもひあしに、この山下にてきけば、小佛にゆくは彼方なりきといふ、高尾の方に曲ればよかりしかと問ひしに、否まだその前の道を右に取るなりといひき、さては路をちがへつるなり、されどなほ甲州街道にて與瀬にはゆくことを得べしとき、歸さにはまだ踏まぬ道をとらむ、迷ひしが中々に面白からずやと、喜びあひしなりけり。
この山の上にて、もて來し瓢の酒くみかはし、卵など喰ふ。神

や下りまさむ、天狗といふもの出ですやなどいへば、何出づるものか、出でむには追剝位のものならむのみといふ、其追剝ならばなほ堪らずといふに、をかしとて笑ふ、吾も亦笑ふ。

○

ゆく道に杉山さやるかへり見ればいま來しみち
に杉山さやる
霜にやけし桑の木ばたに大きなるくさ家一むね
烟ゆたかなり

14
11



かや山のかやの中ゆく水うけてしづかにめくる
水ぐるまかな
九十九折の坂路をおほふ櫛かえで葉びろかしは
のみみぢ滴る
八しほりの紅葉かやく坂の上は霜ふれるなす
茅やまにして

老
若

老翁あり、枯枝を樵りて束ねをり、口のまはりに生ひたる髭は、白かねの針なせるに、頬の色はえもいはれぬ艶を帯び、しまりあるが如く、しまりあらざるが如く、すこし開きたる口には、齒並のよく揃ひたるが見ゆ、なほ數の子に齒音ほこるらむ様したり。

赤姬きはめたる喜びをもて、

「寫真にうつさせてくれないか、

といふ、

「なわに百姓風情を」

とすましいふなり、

「一寸その柴の上に腰かけてゐてくれぬか」

といふに、

「おしやあこれで七十九だ、生れてから病むだことねえだ」

といひすて、彼方ざまにゆく、とゞめあへずて呆れ見ること少時。

「神様だらう、神様だらう」

とあきらめいふもをかし。

こゝをやゝ下りて来る所、道のへの枯草の上に、腰うちかけ

たる男あり、炭俵の如き荷負ひ、手には長き鍬をもてり。

前のに懲りたる赤姫は、

「一寸その荷をかゝせてくれないか」

と、顔の事はいはず、いとまめやかに頼めば、もたる鍬なげうちて畏る、

「なに前のまゝでいゝから、鍬をもつてゐて」

といふに石なして固くなりなり。

「ありがたう」

といへば徐に立ちより、その晝莞爾やかに打見やりつゝ、

「色々なペンシルをつかうんですねえ」

と、坂路のそり／＼上りゆく。赤廻また彼を見おくりて、

「賤山かづと侮るなですねえ」

と、相見て笑ふこと久し。

○

大きな黄葉一もどむかつをのすぎもりやまの

杉を蔽ひたり

杉の森の下しのびゆくたに水のさゝと聲してう

ぐひすのなく

段をなして並立つ大木垣となりぬ西かせつよき

岡の上のいへ

ゆけど／＼道に添ふ山山にそひて竹の樋ながし

水のさゝやく

農 家

薩摩薯きりたるを蓆にひろげて、四五枚ならべ干したる傍に、芋殻さきたるを干せり。表より厨まで見とほさる、悉く板敷なり。その左手の廣くとりたる内庭には、俵つみたり、米かはた麥か。その右手の疊敷たる一間は、客間と寢室とをかねたるなるべし。

板敷のなかばの所に石臼据ゑてひく人あり、刀自の君なる



べし。白き手拭かぶれるによりてにか、色あさ淡黒う見えたり。さ
てもひく物や何。

住家の前に、小さき納屋と牛屋とを兼ねたるがあり、その前
に大きな桶すゑて、せつめとかいふらむ及物にて、ざくざ
くと音して、唐黍の莖の様なるもの切込めり、主人なるべし。
白き黒き斑點の入りたる牛は、三段にわたせる入口の棒の
間より首さしのべて、その切り終るを待てるがごとし。
牛はその飼葉に舌ならし、人はその薯芋殻に腹鼓うちて、太

平を謠ふなるべし。羨ましき哉その牛、どもしき哉その人。

○

薯きりて干したる庭の片すみ、に馬艸をきざむお
としきりなり

黄菊白菊咲ほこりたる庭の奥にくさやひとむね
梭のおとする

深やまにはまれなる扉よ山門よ松おほきなり銀
杏うつくしき

溪にわたす墨塗橋はわざをぎの芝居にすなるせ
りわけのごと

杉は杉もみぢはもみぢおのがじ、むらがり下る
谷の深きかも

杉もみぢむらがり生ふる溪の底をながる、水の
音かすかなり

飼葉まちて首さし出すあめ牛の鼻すりすりにを
とめみづ汲む

紅葉山眞木立つ山は一刷毛のかすみに入りて目
はくれむとす
前うしろ左みぎりにさとの子のよりてたかりて
畫の成がたき
籠おひて畑のかまちを下る子のもろ手にあまる
紅葉いろ濃き
めぐり來しうしろの谿と似たる谿似たる橋あり
もみぢ盛なり



MX

霜がれし桑圃のうちを生ふる麥のあをき針なす
もえいでに鳥

夜 道

千木良にて日はくれぬ。與瀬はちかけれど、吉野がよしといふに、名さへよき心地して、そなたへところざす、まことはまだ與瀬にだに來ぬなりけり。いさゝかの勾配なれど、石しきたる道の馴れぬ草鞋の足にひびきていたし。

與瀬にてきけば、新道を回れば一里、近道は半里に過ぎずといふに、今は近き方をと、いひあはさねど、自からそなたざまに向ひぬ。

村はづれの煉化やく釜のほごりを曲りて、畑の中道たどる。石多くしてやゝもすれば躓かむとするに、夜の色は全く迫まりて、ただ薄明に辿りくゆく。

杉の森の下道、くらす又一しほなるに、搜りく下れば、大きな川あり。多摩川にか、それとしてはあまりに此方によれ

りなど、いひあらがふ内に、川におりぬ。

水たうくく音して流れゆくに、橋なし向の岸に火の光見ゆ。渡なるべしと、聲高においと呼べば、おゝいと答へ、水上を横ぎれる針金の綱傳ひくりて、底あさき舟もて來ぬ。こゝは何川かときけば、相摸川といふなり。馬入は余り廣くも深くもなきやうなるに、上流は流急く、深さも深きやうなりとぞ。

山をめぐりて、又同じ川をわたり、桑の木のさし出たるに、幾



たびか顔すられつゝ、吉野につきぬ。

○

石やまの路なき路をすべりおりて名も知らぬ川
に渡し舟呼ぶ

吉野へのちか道すると山をこえて二瀬の河はら
夕こえわたる

旅
宿

甲州街道最終の宿、相摸の國は津久井郡吉野の里は、高くなれる丘地の上に一筋の町を成し、帯なせる相摸川の流の音は、松ふく風、渚による波かと疑はしむ。

村はづれなる坂本屋といふに入り、まづ浴みて、さて酒くみかはず。

何があるかときけば、牛で願いたいと思ひますといふなり。この地には漬物のみ何の設けもなければ、肉新らしく葱よきに、幾たびか持來らしめ、山中の太古の村の心地すがく。

しく酔ひぬ。仆れぬ。夢は、今日の山今日の川を、二度三度かけ
めぐる。

溪 川

坂木屋の後の崖をすべりなづさひつゝ、川にありぬ。大きな
る岩、小さな石、おのがじゝ處をかまへたるに、玉を砕きて
流すが如き音、さら〜と常とはにひびく。われさゝにして
神の境ならずやと疑ふ。恨むらくは、昨日山路にあひし木こ



りの老翁こゝに來りて、この大きな巖の上に立ちたむには、いかばかり神神しう思はれなむに。

水車のひまなくめぐるは、米などつくにやあらむ。さても一人ゐらず。つけたらむ折には人來てもてゆき、更に黒きを入れおきて、去るにやあらむ。

清ければ棲ますとは、誰かいひけむ。魚のあつまりて上り且つ下る。あはれ、魚とならば、かゝる瀬に、かゝる淵に、棲まむぞ宜かるべき。この境も人の世の如しとせば、魚の隠君子とも

いふべきものか。かの大海に鯨ふり遊ばむ、もとより面白からぬにあらず。かの泥水にひたりたらむ、思ひきりては、こも面白き一つなるべし。さりとは、かの泥を呑みて、一生を過ぎむと、この水をのみて、一生を過ぎむといづれぞ。大海それとは、魚として心安く、一生をおくらむは、こゝわたり、の川なるべきか。

○

淵となれる水の底にも波あれやながれてはまた
魚の登る見ゆ
むれ遊ぶ小さき魚の身がへりにいなづまなせり
みな底にして
しづかなる岩山かけをゆく水にさかりのぼるは
何のうをぞも
谷をゆく玉なす水に畫の具とさきてきよき境を寫
してをゆかむ

畫具とき畫筆あらひし山川よ世のちりうけすと
 はにきよかれ
 岩に觸り岩にくだけてゆく川の水いそがしきあ
 といそがしき
 岩にふりて曲りなぐるゝ谷水にちりて巻かれて
 ゆくもみぢ哉

雨

昨日より凝りに凝りて、今にもと危み見し雲は、遂にちぎれ
 て、一つくこぼれ來にけり。今日の一日を事なからしめ給
 へと祈れど、理なしとや神も享けまさいらむかし。

そぼふる雨に、赤姬がうつしはじめたる畫は、畫の具のいと
 い乾かぬ上にふりかゝりて、かけば散り、かけばちりつゝま
 とまるべくもあらぬに、そこら駆けめぐり、木の葉枯芝ひろ
 ひもて來て、とある岩の蔭にあつめ、持たる燐火數多たばね
 すりて、火をたく。あまた度消ゆるにも屈せず、遂に思を遂げ

て、かきかけたる水彩畫かはかす。
寒き溪間の風もこれには及ばず、雨亦遂に及ばず、快いふべからず。

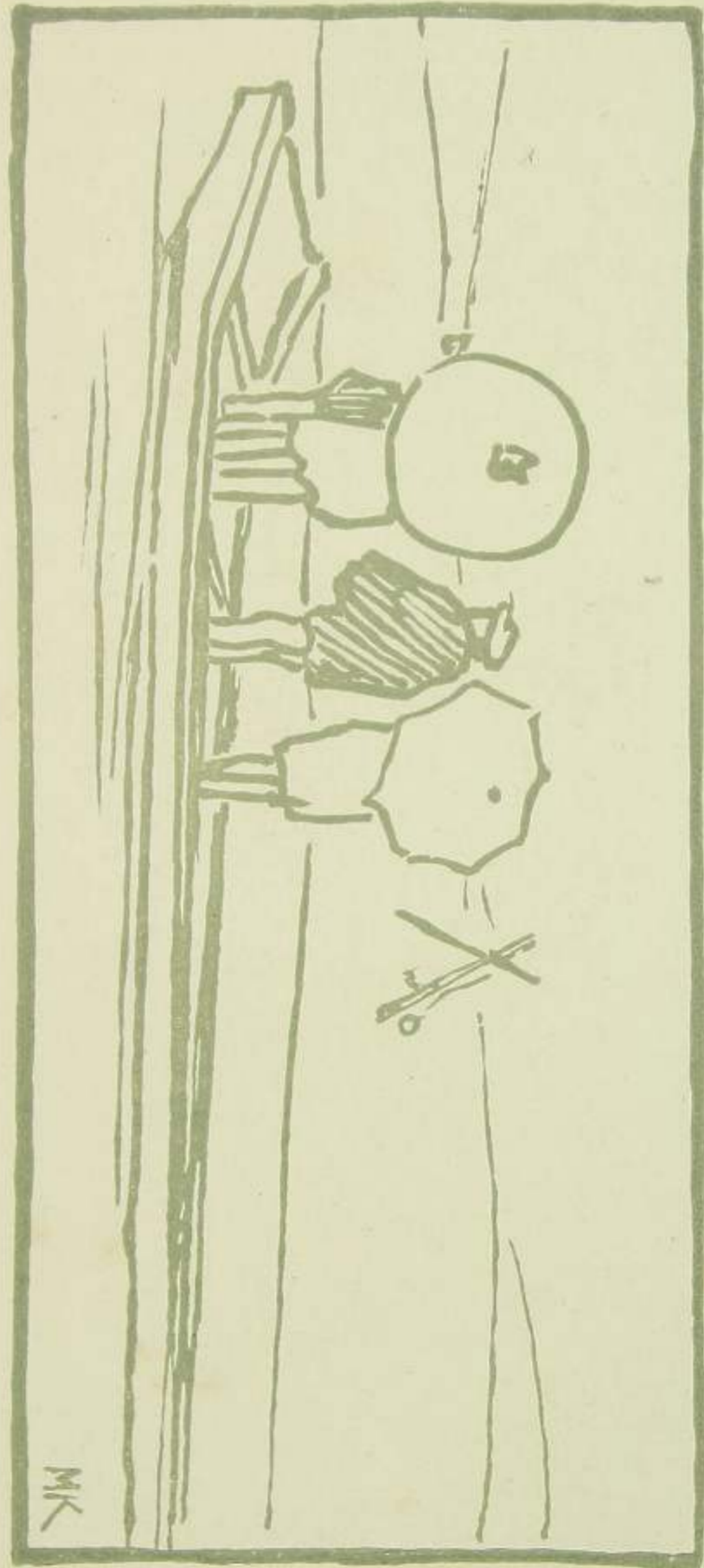
○

山にそひて川にそひたる坂みちの雨ふりみちを
ぬれぬれぞ行
山にそひてながる、川の川くまに桑ばた幾畝わ
ら家いくむね

二またにわかれながるゝふた川の彼方此方に枯
れしくは立つ
をちの山こちの山盡きて道盡きてながれ一すぢ
水の足はやし
渡守がふせやの中の櫓の火に人つとひよりぬわ
たし待つ間を
水底の石さへ見ゆるやまそひのきよきかは瀬を
薪ぶねくだす

與 瀬

馬入川の川上は相摸川といふとぞ。水の勢すざましともあ
 らず、緩しともあらで心地よきに、針金ひきて舟つたへやる。
 荷馬の口とりてわたる、上野原より來りし菓子屋の、丈にあ
 まりたる荷おひて渡りたる、蛇の目の傘、蝙蝠傘のかさなり
 てわたりゆく、みな詩ならぬはなし。
 雨そぼ／＼と降るに、一つの傘に、顔のみ濡れぬやうにして、



われら二人は歩む。

昨日の石道には懲りたり、草鞋にていとこわれたる足、更
にあらしたりきとて、遠しとは思へど、廣き道たどる。

與瀬につきいかりやといふにとまりて、草鞋ときやくが如
き湯に足濯ぎてあがる心地、知らざる人には語りがたし。

何かあるときけど、牛の外には無しといふに、又かと思へど
せんなく、よべの如く鍋つゝきあひて食ふ。

坐に侍りし某、某、一人は八王子のにて、一人は赤坂のなりと

か。咄おもしろし。

「夜前は吉野のお泊、お出でしたらう、」

「どこへ、」

「そらあの下の方へ、」

猶分かず、きけば、下の方とは、かの赤廻が牛乳屋と見立てし
所にて、紅き袖ひるがへす所なりとぞ。

「ねえ旦那、いらッしやらなくッて、それではお知り遊ばさ
ないはねえ、」

「何の事だ、」

「お咄おませうか、あそこなはねえ、おもしろいんですよ、薪
も運んだり、薪も割つたりしますのよ、」

「さうか、」

呆れをれば、某は更に話ひきとりてつゞくるなり、

「着物もねえ私^{わたし}見たやうな風で、見られたざまではなくつ
てよ、」

所謂商敵にやと僻みもするなりき。されど彼は公けなり、も

し然りとするも、これは私なり、いさゝかの影口などの功を成さるべきにあらずとをかし。

「八王子といへば繁華な地じゃが、歌でもきかせないか、」

「歌といつても東京から卸して來ますの、東京のお方には耻かしうございますさ。」

「そんなにはないでも、御自慢のいつもの咽でもお聞に入れるさ。」

と、他の某より横槍入れらるゝに、内より火な出しとやう

に、ぬすみ睨むなりけり。

「八王子といへばねえ、あの横山町の裏に汁粉屋がありませう。」

眉ひそめて意ありげにいふ、

「汁粉屋、澤山あるさ、いゝじやないか、下戸の樂園さ、上戸には上戸の樂園があるから。」

「ちつとも宜かありませんは、あすこは看板だけでさあねえ、行くとすぐ寫真をもつて來ましてねえ、其裏にはち

やあんと値段が書いてありますの、さう藝妓もありませんが、堅氣の娘さんが多いことよ、
一つの暗潮はいづこにも流れ居るを知りて、憤しさ限なけれど、戯れに、

「さうか、そりやあ耳よりだねえ、寄らうく、」

「お寄なさいねえ、面白うございますよ、」

彼は既に面白しといふ、その我前の世を、憚なく自らいふなり。さて今のわが姿には心づかぬなり、今のわが身は何をす

るかにも心づかぬなりけり。
肉つゝきあひ、うどんなど喰ふ、饅頭の蕎麥くさきなどなか
くゝに興あり。
汽車に乗らむと出るに、いつのまにか雨霽れたれば、又小佛
にと思ひたつ。

○

渡し守が小家のうちより道づれの三人が乗れる
舟を見おくる

渡し舟まつ問ひさしみ舟小屋に妻が賣るなる菓子餅を食ふ

我せこの今宵や來ると斧とりてたきぎわる間を

頭うなだれぬ(吉野の娼婦のさまをきゝて)

待人の來たりときゝて斧すてゝ衣とりかへて笑

みていで來る(同じく)

あれし手を人に見せても薪わると水仕をするこ

いひは兼つゝ(同じく)

桑の葉の霜にちゝれしうら畑に秋をのこせり小
ぎくひごもど

小 佛

組わけし橋をわたらずて、小さき道を山にのぼらむとすれば、花やかなる前垂がけの女二人ありて來れり。

「美人が來るやうなら、大丈夫家がありさうですな、

かくいひつゝ、ゆく赤姫につきてめぐれば、鐵道の橋ありか

ねて踏切をこえてと教へられしは、こゝならむと、獨うなづきてゆく。

谷川きよく、紅葉麗はしきに、胸つき坂をのぼる。人あり道をきけば、

「小佛ならずうつと前から、鐵道を踏切つてゆくでがす、
 といはるゝに驚き、急ぎ下りて、思ひもかけぬ小さき路を、鐵軌のかなたにうつりてたどり來る。

柴の山、又芝の山、烈しき坂の草の露ふみわけて來れば、家あ

り、犬に吠えられながらさけば、

「この道をどこまでも上ると、峠があるでがす、それを小佛といひますだ、」

なほのぼるべきにかど、あへぎくゆく。霧は深くくだりて山をつゝむ。いよゝ暮れしなめり。

鳥居あり、紅葉の中にすこし見ゆ。立石あり。家二三軒、犬また吠ゆ。昔物語にある、追剝といふしれ者の出けむは、このあたりなめり。

疲れに疲れたれど、かゝる山、かゝる小路にて、闇くなりては
 困うじなむと、天ぞゝる杉の下道、掛聲して走り下る。
 谷の水は漸くに音たかく、道は漸くに廣し。

○

くれなゐの千しほの下をゆく水の玉よりきよく
 くだけ散つゝ、

つまづけは千尋の谷にちち入らむ崖のそばみち
 紅葉いろ濃き

杉の木のこもり垂れたる山と山と中ひきくなり
 て谷の水早し
 三步ゆけば一飛とびて山みちを名もしらぬ鳥の
 道しるべすも
 山にのぼり山にのぼれば路に伏す小草の露のし
 ごとゝ身に染む
 遠くゆく人いぶかしみ一つ家のさつ夫が犬のも
 ろこゑに吠ゆ



こし方も行くさきも見えぬ山路におほひ伏す芝
つゆしとい也
小佛のたうげのさざりくらき中に常盤木ふかし
鳥居半は見ゆ
霧の中に犬の聲きこゆ暮せまるこの山の上にひ
とやすむらし
ふもとにてきし道のり峠にてきけどもあなじ
道のりにして

道 づ れ

山路あり盡きて、坂路ながらやゝ緩くなりたる川添道をな
づみ來れば、路二つにわかれつ。右すべきか、左すべきかなど
たゆたひしが、右の方廣ければとて、そなた様に物す。

左の道は岸の上になりぬ。その道ゆく人あり、道をきけば、

「そつちでもいけるが遠いだ、こつちの方が」

といふに、丈高き草の中を這ひのぼりて、その人におひしく。

線路をこえ、崖を下だる、危き限なし。この男あやしき奴にて、われらを道なき道に誘はんとにやなど危ぶむ内に、橋の上に出づ、

「そらね、あの道を來れば、こゝへ出て來るのだ。私共が此先の光の點いどる邊へ行く時分に丁度旦那方は此處へ出で來る位だ」

危ぶみの思のとくると共に、近かりしを心の中に喜びつゝ、隨ふ。談話もおもしろくなりぬ。

「わしらの村は、これで二十五軒ばかりだがね、新道は出來る、汽車がひらける、方なしでさあ。これが汽車が開ける前には、もう新道の爲に、皆もう覺悟して、百姓になるつもりで、木は植る、機は織るといふ鹽梅しきになつて居つた處へ、鐵道の工事が來て、三百と五百の金にありつかねえものはなしさ、斯な鹽梅なら心配するにやあ當らねえと、そいつをみんな引かへて、夜が夜中でも、二里半の道を八王子へ突つ走つて、まるで烟のやうにして歸つて來る、人

つ子一人通らなくつて、まうけは一丈だつてなし、否應なしに往生して仕まひましたのさ、
彼は流るゝ水のやうに話して、なほ飽かじとやうにつゞけいふなり、

「今の若い衆は、皆しまつた〜といふが、なにしまつたじやない、金子がないんでさあ、景氣でもよけりやあ、すぐずぼらになつてしまふんでさあ。」

人生を語りつくしたりとやうに、頗、意氣の昂れるものある

なり。

谷川をへだて、黒く〜生上れる杉の山の、いづこなるらむ、幽けき聲のきこゆるに、

「ねえ君、鹿が鳴くじやあないか、」

二人が談り合へば、愚やといはぬばかりに、

「なに狸むじなでさあ、わしらが血氣盛になつてからは、鹿はもう居なくなつてしまつた、己わしは是で三十五、親父は七十二でがすがね、親父の若わかえ時分には、猪は愚か、狼でもよく出

たといふ事ではさあ。何しろあの上りが二十六丁、向うの下りが二十八丁ですから、元はゐたでせうよ、が、今分はもう狸に兎でがすねえ。その狸でも、皮一枚が四圓もするだから、二十圓も二十五圓も出して、犬を買つてさ、農業が隙になるだと、捜し歩いて取れるだけ、捕つてしまふんでが
 さあ、
 面白き咄きく間に彼がゆくべき小名木といふ里につきぬ。懇に教へられつる道を辿り来れば、道はいよ／＼大きくな

りて、燈火やゝ多くなりぬ。見おぼえある橋、見おぼえある樹、その家、その川、いつのまにか、浅川につきて、昨日の道を歩み
 ゐしなりけり。

七時二分出の汽車に乗る。

○

天地は狭ざりの中につゝまれて神代おぼゆるや
 まのうへかな
 なみ立てる神代の杉の影くらき一すぢみちを暮

れてわが行く
夕霧にあほはれはてし杉やまのいづこなるらむ
むじな頻鳴く
杉の森すこしあかるくたに水のまがれるところ
石ほとけ立つ
道づれと成にし人をおそれかつたのみつゝ
深山路くだる
人にわかれ山にわかれてくらがりの小さき路を

搜りくゝ来る
友をたのみ友に頼まれて杉くらき草ぶけみちを
暮てぞ我來し
汽車にのりて越し山道をかへり見ればかつ恐し
きかつ懐しき
共にみし山のみとり畫川の歌さだめあひする汽
車のうちかな
手折來しもみぢの色のあせぬまを摺りて染おか

む日記の間に

二人づれ終

明治三十七年二月廿三日 印刷
明治三十七年二月廿六日 發行

二人づれ奥附

定價金貳拾錢

著者

石 樽 千 亦
小 林 萬 吾

發行者

東京市神田美土代町二丁目一番地
森 田 義 良

印刷者

東京市京橋區日吉町四番地
渡 邊 爲 藏

發行所

東京市神田美土代町二丁目一番地
大日本歌學會

